

「神の栄光と魂の聖化のために」

大学宗教学主任 東方 敬信



「さて、あなたがたの間で面と向かっては弱腰だが、離れていると強硬な態度に出る、と思われている、このわたしパウロが、キリストの優しさと心の広さをもって、あなたがたに願います。」(コリントの信徒への手紙二 10章1節)。

エピケイア

「キリストの優しさと心の広さをもって」という聖書の言葉は、初代教会の大伝道者パウロが、自分に対して悪評を立てている、コリント教会に対して、まさに信仰者の寛容によって、教え諭している言葉です。ここでは、パウロが牧会者として悪評に対して忍耐強く接し、教会をキリストの体・信仰共同体として建て直そうとして労苦しているのです。しかし、今回はそのことには触れず、「キリストの優しさと心の広さ」という聖句に集中したいと思います。

「優しさ」と訳されているギリシャ語、「プラウテース」は、忍耐とか温和を表します。また「心の広さ」はエピケイアで、英語聖書ではジェントルネス、口語訳聖書で

は「寛大さ」また文語訳では「寛容」と訳しています。ある教養人は、これを「スウィート・リーズナブルネス」つまり「温かい合理性」と訳しています。

マシユー・アーノルド

日本の最初の神学者といつてよい、富士見町教会の牧師、植村正久は、イエス・キリストの福音伝道と同時に、文学を愛し文筆活動で文化的影響も与えていましたが、明治23年の『日本評論』で「マシユー・アーノルド曰く、詩は生命の批評なり。その目的は高尚なる思想を人生に適用せしむるに在りと。」と記しています。つまり、詩は、高尚な思想を感動によって心に刻み込み実生活に適用させる力がある、ということでしょう。このマシユー・アーノルド(1822~1888年)は、父親が有名なパブリック・スクール、ラグビー校の校長で、彼自身もそこを卒業し、オックスフォード大学を終えて、イギリスの教育界に責任を持つ視学官の役割を果たしながら、文学者、詩人として活躍しました。宗教より

も文学の方がよい影響を与えると考える時代に、彼は聖書の力について確信していました。そのマシユー・アーノルドは、先ほどのエピケイアをキリスト教の中心とするほど愛していました。彼は、「これを「スウィート・リーズナブルネス」、「温かい道理」、あるいは「温かい合理性」と訳しています。19世紀の詩人、思想家、教育者マシユー・アーノルドは、イエス・キリストから、この「温かい合理性」を与えられて、キリスト教はいま世界にそれを広める使命となっている、と確信していました。

マシユー・アーノルドは、歴史学が発達しても、聖書の言葉に対する信頼を失いませんでした。いや歴史学を越えた聖書のメッセージに確信を持っていました。彼の言葉には、「さらに人の精神を聖書に浸すなら、限らない確かさと快活さを与えられる」という言葉があります。彼の頼もしい言葉です。さらに紹介しますと、彼は「永遠なるものは、わたしの強さである」と言うのです。英語では、*The Eternity is the strength of my life. とあります。*

ヘブライズムとヘレニズム

「温かい合理性」、スウィート・リーズナブルネスは、アーノルドにとって、ヘブライズムとヘレニズムの総合でした。ヘブライズムはモラルの世界を代表し、ヘレニズムは理性文化の世界を代表します。総合すると「人間性の溢れた知的文化」ということになりました。これはまさに、21世紀の大学のめざす目的にもなるのではないでしょうか。そして、このスウィート・リーズナブルネスを担っているのが、アーノルドにとって「教養のあるキリスト者」でした。神学だけでなく、他の学問によってもキリスト教の人間性を育む大学で教えるキリスト者を指していました。「不信仰な教養人も信仰的な野蛮人も問題である」とは、日本の神学者・熊野義孝の言葉であります。アーノルドの「教養あるキリスト者」は、教養ある聖職者の「クレリシー」を引き継いでいます。

アーノルドの先輩である19世紀初めのコルリッジは、神学と他の学問の両者を修めた教養ある聖職者「クレリシー」がリーダーシップを発揮すべきだと考えていました。彼らがオックス・ブリッジの指導をすべきだと考えました。このことは、ただ知的能力だけで高等教育にあたるのではなく、人格的影響力があることを自覚させます。知的能力と人間性の絶妙なバランスが21世紀の大学教育にも大切になってくるに違いありません。

T・S・エリオット

ところで、20世紀に上記のスウィート・リーズナブルネスを受けとめた人物がいました。T・S・エリオットは、クレリシーをさらに「キリスト者集団」という言葉に引き継ぎます。それは、大学教育の目的にかかわる問題意識です。「キリスト者集団は組織などというものではなく、…聖俗両者から、そしていずれもかなり高度の意識をもち、精神的にも知的にも高度な発展をとげている人びとから成り立っております」と言います。そして、20世紀前半のエリオットは、教育を管理するという意味ではなく、人間性教育の目標をめざす教育と考えます。「キリスト教社会において教育は宗教的であればならないのでありますが、それは教育が聖職者によって管理されるという意味ではありません。まして圧力を加えたり、各人すべてに神学を教えこんだりするわけでもなく、その教育の目的がキリスト教的新生の哲学による方向付けがなされるという意味であると言います。それは、専門家としてキリスト者以外の人も含みますが、人生の目的は「神の栄光のためであり、魂の聖化のためである」ことを知っている人たちです。つまり、キリスト教教育を知っており、それに協力できる人も含めた大学人すべてを指していると言つてよいでしょう。

意識化という使命

世界教会会議でも活躍したパブロ・フレ

イレは、解放の教育学者といわれていますが、彼は、人間と歴史の限界状況を発見して、それに向き合う教育を「意識化」と言いました。教育とは知識を銀行のように貯蓄するものではなく、私たち人間が教師も学生も対話しながら、問題解決能力を発揮しながら、限界状況をみつけどし、主体的に成長していくプロセスなのです。ですから、固定化した自己や歴史の枠組みを解きほぐしながら、さらに真理にむかっていく実践的な教育をエンパワメントと言つて定着させました。

知ることは、希望の未来に向かって力づけられることです。イエス・キリストを知ること、キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、…へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をおあたえになりました。」(フィリピ2章6節以下)と知ることです。

私たちは、どのような社会層にいたとしても、低きにくだられた神の子イエス・キリストの恵みに感謝し、生きる目的が自分の栄光のためではなく、「神の栄光のためであり、魂の聖化のためである」ということを意識化し、他者と共に喜んで生きていきたいと思えます。またそれを力づける「人間性溢れる知的文化」を求めて生きていきたいと思います。